

379786

近代日本社会思想史

I

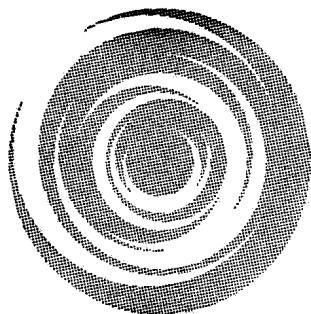
編 集

古 田 光
作 田 啓 一
生 松 敬 三

監 修

宮沢俊義 大河内一男

近代日本思想史大系 (1)



有 斐 閣

監修者紹介

みや ざわ とし よし (元東京大学名誉教授)

おおこう ち かず お (東京大学名誉教授)

■

編者紹介

ふる た ひかる (横浜国立大学教授)

さく た けい いち (京都大学教授)

いさ まつ けい ぞう (中央大学教授)



近代日本社会思想史 I

近代日本思想史大系第1巻

昭和43年11月30日 初版第1刷発行

¥ 2500.

昭和53年5月30日 初版第7刷発行

編者	古田光
	作田啓一
	生松敬三
発行者	江草忠允

東京都千代田区神田神保町 2-17

発行所 株式会社 有斐閣

電話 東京 (264) 1311 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座 東京 370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

©1968, 古田光・作田啓一・生松敬三

Printed in Japan

印刷・株式会社精興社 製本・高陽堂

落丁・乱丁本はお取替いたします。

1330-070715-8611

まえがき

ここ数年来、明治維新以来今日にいたるまでの、近代日本の歴史を、あらためてふりかえり、私たちの今日の位置をたしかめようとする関心が高まってきている。そのことは必ずしも、今年がたまたま維新から数えて百年に当たっているからといった、たんに偶然的な事情によるだけのことではあるまい。私たち日本人がそのなかにおかれている内外の社会的な状況の急激な変動そのものが、あらためて私たちに対して、私たち日本人のおかれている歴史的な位置や方向についての根本的な再検討をうながしてきているからである、と思われる。

この『近代日本思想史大系』（全八巻）は、以上のような問題意識のもとに、近代日本百年の歩みを、とくに思想の次元から、多角的に、また総合的にとらえ直し、そのことを通して私たちが今日直面している思想的な状況のもつ歴史的な位置や課題を明らかにするとともに、未来にむかっただの進路をさぐる手がかりを提供することを願って、企画されたものである。そしてこの「社会思想史」は、政治思想史、経済思想史、法思想史などとともに、この『大系』の一環をなすものとして企画され、編集されたものにほかならない。ところで、「社会思想」とか「社会思想史」という言葉は、これまできわめて多義的に用いられているので、私たち編集に当たったものが、どのような意図のもとに、どのような視角から、本書の構成に当たったか、という点について簡単に述べておきたい。

私たちは、本書を編むに当たって、「社会思想」という言葉を、広い意味にとり、社会生活の全体とのかかわ

りにおける思想のあり方を示す言葉としてとらえることにした。すなわち、それを、政治思想、経済思想、法思想、等々とならんで、社会生活のある特定の領域にかかわる思想を示す言葉としてではなく、むしろそれらを全体として包括し、統合する意味をもった言葉としてとらえることにした。そうすることによって、本書を、この『大系』全体に対する一つの概観的な見取図、あるいは基礎的な前提といった意味をもつ書物たらしめたい、と考えたのである。しかし、社会生活の諸領域にかかわる諸思想の多様な動きを、どのような視点から包括的・統合的に把握しうるか、また把握すべきかということとは、必ずしもすではっきりした答えの出ている問題ではない。むしろ、具体的な個々の動きの考察を通して、最後に再検討さるべき性質の問題であらう。しかしまた、ある程度の仮説的構想なくしては、諸事実の断片的な考察とその羅列に終わるほかないことも明らかである。ここでは、そのような弊を避けるために、社会観・人間観の基本的な構造の究明というところに重点をおいて、近代日本における諸思想の多様な動きを考察するとともに、それを通して近代日本における社会思想の構造的な特質とその内包する問題点を析出してみよう、と考えたのである。

このことは、本書の構成および叙述をつらぬく基本的な目標であり、視点であるが、こうした意図を達成するために、本書においては、とくに次のような諸点に留意し、その究明のために若干の工夫を試みてみた。思想の動きは、その現実的な基盤となり条件となっている、社会そのものの動きと無関係に生じてくるものではない。本書では、近代日本における社会思想の多様な動きを、日本における近代社会の形成・発展・変容の過程との連関において、その諸段階に即して、考察してみようと考えた。このような観点から、本書では、社会の歴史的な展開の過程に対応する思想の歴史的な展開の過程を六つの段階（「近代思想」の生成、民権論とナショナリズム、明治社会の思想構造、大正デモクラシーの統合と分極、日本型ファシズムの擡頭と抵抗、戦後日本の思想的課題）に区分し、さ

らにその各段階の叙述を次のような二つの部分に大別することを試みてみた。すなわち、各段階における社会思想の全体としての動きを展望し、その連関構造や特質に照明を当てようとする『概観』の部分と、そこに内包されているいくつかの重要な問題点を取りあげ、いっそう立ち入った究明をおこなおうとする、いわば『各論』の部分とに大別することを試みてみたのである。

その場合、さらに『概観』の部分においては、その考察を通して、社会そのものの歴史的な変化と思想の変化との動的な連関構造のあり方をさぐり、これができるだけ鮮明にえがきだすことに重点をおき、後者の『各論』的な部分においては、従来の研究成果をふまえつつ、現代的な視点からこれに新たな照明を与えるというところに力を注ごうとした。また、具体的な内容に関していえば、とくにつぎのような諸点を念頭におき、その究明をめざそうとした。(1)日本における社会と思想の近代化の過程を、世界的な近代化の過程との連関においてとらえ、その構造と特質をさぐる。その場合、たんに西欧との関係ばかりではなく、とくにこれまで不十分であった、アジアとの関係の解明にも力を注ぐこと。(2)日本においては、外来の思想と土着の思想、知識人の思想と庶民の思想、近代的な思想と伝統的な思想とのあいだに、特殊な結合と反撥の関係が生じてきている。これは従来も問題として論議されてきた点であるが、歴史的な再検討を通して、問題点の所在とその克服の方向をさぐる。こと。(3)このように社会と思想の近代化の過程を「日本」という特殊な条件との連関において考察するとともに、そのような考察を通して社会と思想の「近代化」そのものが内包する普遍的・原理的な問題点（たとえば、個人・共同体・国家・社会の原理的な関係をどうとらえるべきかとか、科学とイデオロギー、自然と人為などの関係をどうとらえ直すべきかといった諸問題）をも再検討し、思想展開の新たな可能性をさぐる。以上のような諸点である。

私たちは日本人として、歴史的に形成された日本の社会と文化のなかに生きている。思想の発展方向というも

のは、必ずしも与えられた歴史的・社会的な条件によって、あらかじめ一義的に決定されているものではないであらう。しかし、与えられた特殊な歴史的・社会的な条件とそこに内包されている問題点——私たち日本人にとって切実な、不可避的な問題点——との自覚的・主体的な対決なしには、根本的な意味において、いかなる創造的發展も不可能であるということもまた、たしかであらう。私たちは、本書における歴史的な考察を通して、近代日本における思想の創造的發展の伝統をさぐり、その確立に寄与したいと念願したのである。こうした念願がどの程度に実現されているかは、読者の判定にゆだねるほかはないが、私たちの試みが、読者自身の思索を展開していくための、一つの手がかりともなれば幸いである。

一九六八年一〇月

編者

目次

まえがき

第1部 「近代思想」の生成

I 徳川時代における「近代思想」の形成

源了圓

3

1 一六・七世紀における「近代思想」の芽生え

3

A 儒教採用の歴史的意義

3

延期された近代(3) 朱子学とは何か(4) 朱子学は
どのような内容をもつか(5) 朱子学はどのように受け
とられたか(8)

B 一七世紀儒教の「近代思想」への傾斜

10

人倫の発見と人間性肯定の思想(10) 経験的合理主義の
成立(11) 徂徠の事実主義(13) 徳川時代の思想史の
分水嶺(16)

2 一八世紀の開明思想

17

A 一八世紀の精神状況

17

3

商業肯定の思想と生産の思想

A 商業肯定の思想

徳川時代の町人の社会的性格(45) 町人と宗教意識(48)

浄土真宗と世俗生活(49) 鈴木正三と職業倫理(51)

石田梅岩と心学運動(54) 梅岩の人間観と商業肯定の思想(56)

梅岩の「儉約思想」(58)

B 経世家的発想と大町人の立場

経世家たちの経綸(60) 山片蟠桃―大町人のイデオロ

グ(61) 海保青陵―商品経済の擁護者(62) 本多利明

―幕末への架橋(65)

C 生産の思想

貝原益軒と宮崎安貞(67) 二宮尊徳における天道と人道

新しい質の思想的発想(17) 徂徠における自由探究の精神(18)

B 三人の合理主義の思想家

三浦梅園による自然哲学の再構成(19) 山片蟠桃の科学的批判精神(24)

海保青陵の経済合理主義(30)

C 安藤昌益の自然観と社会思想

「知られざる思想家」(35) 「万人直耕」の生産社会の構想(36)

封建的イデオロギーに対する根本的批判(38)

昌益の自然観(39) 昌益の社会思想―尊卑上下の価値観の否定(42)

(69)

4 維新の動乱期における「近代思想」の形成

75

幕末における思想の特質(73) 第一世代の知識人—世界への開眼(76) 軍事への関心を示す武士出身の第二世代の知識人(77) 第二世代の思想と清末改革思想との比較(78) 儒教文化と西洋文化とをどのように接合しようとしたか(80) 第三世代の成立—対決さるべきものとしての儒教(82) 「近代化」の推進者—思想における連続と非連続(85)

II 「鎖国」日本と世界

生松敬三

87

1 「鎖国」の問題—和辻哲郎『鎖国』を中心に—

87

和辻の「鎖国論」(87) 和辻「鎖国論」の問題(91)

2 「鎖国」日本と世界—洋学の展開を中心に—

96

「鎖国」以前における南蛮学の流入(96) 蘭学の成立(97) 蘭学の影響—批判的・科学的態度(99) 蘭学の影響—人間平等観(101) 対外的危機感と蘭学の「官学化」(102) 幕府による「蘭学」の統制(103)

第2部

民権論とナショナリズム

105

I 啓蒙主義・民権論・ナショナリズム

飛鳥井雅道

107

1 士族意識をめぐって

107

II 近代主義と反近代主義

1 忠誠意識の変容

A 封建家臣団の忠誠心と尊王思想

- 封建的忠誠対象から「尊王」シンボルへの転位(143) 吉
田松陰における忠誠のロジック(146) 松陰の「転向」――
黙霖との論争を通じて(149)

B 維新政府における忠誠の諸矛盾

- 朝廷と藩との間にひきさかれた忠誠心の分裂(152) 藩主

2 啓蒙主義

- 武力討幕か大政奉還か(107) 玉と脱藩(109) 「我長
州」(111) 士族と農民(112) 支配の体系(113) 廃刀
令から西南戦争へ(116)

3 民権論からナショナリズムへ

- 近代技術の創設と旧幕臣(119) 三井と三菱(121) 官
僚・官員の群れ(123) 差別の問題(124) 啓蒙主義の分
解(126)
「民権」意識の性格(128) オルグの集団(130) 準抱集
団とその現実(132) 『佳人之奇遇』の転換点(136) 第
一議会議員の発想(138) 平民主義と国民主義(139)

橋川文三
飛鳥井雅道
河野健二

への恩義と新政府への忠誠の矛盾—西郷と大久保の場合
(153) 「尊王思想」における維新官僚と国学者(153)
近代的ネーションを志向する忠誠心(158)

C 生成期のネーションと忠誠の転位

159

国民的忠誠心の形成(159) 西南戦争と忠誠の問題—福沢
の忠誠論(160) 自由民権運動と忠誠の問題—植木の忠誠
論(162)

2 欧化と国粹

165

幕末の医学生(165) 開化と専制のギャップ(167) 大阪
事件(169) 男と女(171) 「経綸策」(173) 国粹イメー
ジの変転(175)

3 知識人と「西洋」——論吉と兆民——

177

西洋主義のイデオロギー(178) 西洋への接近(182) 西
洋主義の成立(185) 西洋への対抗(188)

第3部 明治社会の思想構造

I 明治国家の思想構造

岩井忠熊

193

1 明治国家の理念と現実

193

A ナシヨナリズムへの統合

193

2

個人主義・国家主義・民主主義・社会主義

A 「家」と個人主義

明治後半期における「家」と家族制度(210) 「家」と文学(211) 青年層における個人主義(212) 漱石の個人主義(213)

B 国家主義思想

蘇峰の「帝国主義」(215) 社会ダーウィニズムの立場(216) 樗牛の「日本主義」(217) 国民教育の国家主義的動向(218)

C 民主主義と社会主義

内村の戦後社会への批判(219) 急進民主主義の展開としての普選運動(221) 孤高の民主主義(222) 社会主義の誕生(224) 幸徳の直接行動論と片山の議会政策論(225) 明治社会主義の意義(228)

B 「社会問題」の発見

「社会問題」の発生(204) 「日本の下層社会」(205) 労資対立の背景(207)

画期としての日清戦争—ナショナリズムへの統合(193) 自由民権運動の地下水(195) 国民教化策の展開(196) 「膨脹日本」の立場—西園寺路線と山県路線(199) 言論界の帝国主義的傾向(201)

3 浪漫主義と自然主義——むすびにかえて—— 230

民衆と知識人双方の不幸⁽²³⁰⁾ 民衆の生活と文学的理想⁽²³¹⁾
自然から人生への転換⁽²³²⁾

II 恋愛観と家族観——北村透谷と巖本善治—— 作田啓一 235

透谷を問題にする理由⁽²³⁵⁾ 全体的なものとしての恋愛⁽²³⁵⁾
「政治」と「恋愛」⁽²³⁸⁾ 恋愛牙城説の社会学⁽²³⁸⁾
的インプリケーション⁽²⁴⁰⁾ 巖本の恋愛結婚観⁽²⁴¹⁾
透谷の結婚観⁽²⁴³⁾ 西欧恋愛史素描⁽²⁴⁶⁾ 透谷の反俗⁽²⁴⁷⁾
性の源泉⁽²⁴⁷⁾ 「想世界」対「実世界」の区分の意味⁽²⁴⁹⁾
「人為」と「自然」との距離の縮小化⁽²⁵¹⁾ 批判的思想⁽²⁵³⁾
と適合の思想⁽²⁵³⁾

III 戦争観と平和観 藤井松一 255

1 共和制国家観と非武装平和論——序にかえて—— 255

2 キリスト教における〈戦争と平和〉 259

天皇制成立期のキリスト教界⁽²⁵⁹⁾ 教界主流の戦争観⁽²⁶¹⁾
内村鑑三の〈義戦〉論⁽²⁶⁴⁾ 北村透谷における平和思想⁽²⁶⁶⁾

3 日露戦争における主戦論と非戦論 268

木下尚江における反国体論⁽²⁶⁸⁾ 主戦論的潮流⁽²⁷⁰⁾
絶対的非戦論⁽²⁷¹⁾ 木下尚江の戦争観⁽²⁷³⁾ 平民社の

反戦論(275)

IV 近代的世界観の哲学的形成

橋本峰雄

283

問題と視点(283) 明治哲学史の概観(288) 西周『百一新論』とその周囲(292) 有機体の哲学(297) 西洋哲学史における近代の理解(299)

付論 思想史の課題と日本の近代

古田 光

305

思想史とその現代的課題(305) 現代日本の問題状況(306) 日本の近代化とナショナリズム(309) 「文明開化」の思想史の意味(311) 思想のなかの近代(314) 思想史の思想史(316) 思想の構造と変動(318)

事項索引

人名・著作索引

執筆者紹介

1 「近代思想」の生成



おらんだ正月 寛政6年閏11月11日が太陽暦では1795年1月1日に当たるということで、江戸の蘭学者大槻玄沢は、友人を彼の芝蘭堂に招いて陽暦の正月を祝った（原名「芝蘭堂新元会図」早稲田大学図書館蔵，中央公論社提供）。

I 徳川時代における「近代思想」の形成 源 了圓

一六・七世紀における「近代思想」の芽生え

一八世紀の開明思想

商業肯定の思想と生産の思想

維新の動乱期における「近代思想」の形成

II 「鎖国」日本と世界 生松敬三

「鎖国」の問題

「鎖国」日本と世界